

## ■ 会長就任のご挨拶 ■

横田 雅弘 (明治大学国際日本学部)

この度、学会長拝命をいただくことになりました明治大学の横田です。私は、22年ほど前に、留学生のアドバイジングとカウンセリングへの関心からこの学会に参加させていただきました。新米でした頃、江淵一公先生(元学会長、故人)が私の拙い投稿論文に真っ赤になるほどの貴重なコメントを下されたことを今も鮮明に覚えております。そのご指導に深く感銘を受けまして、この学会に多少とも貢献できたらという思いがございました。その後、佐藤郡衛学会長のもとで一度だけ事務局長の任に当たりましたが、かえってお世話していただくようなありさまでした。

私の研究関心は、その後留学生個人への対応から、地域の外国人支援、まちづくり、留学生政策などへとよりマクロなものに拡大して参りました。それでも、歴代学会長の諸先生方のように幅広く異文化間教育全般を研究したことがなく、また、目の前の実践に追われてきたことを口実に、深く学問的な研究を極めたわけでもございません。このような私が学会長の重責を果たせるのかと、誠に心もとないのですが、しかし、一度くらいしっかりと貢献せよという江淵先生のお言葉と受け止め、非力ながら尽力する所存です。

まだ着任直後で自分の考えもまとめきれておりませんが、できれば次の二つの案件に着手したいと考えております。第一は、異文化間教育学の目指す方向性についてのものです。異文化間教育学は、歴史的には主に多様な立場の外国人あるいは外国人との関係を捉えて対象別に研究を進めて参りましたが、近年、佐藤学会長、小島学会長、山田学会長は、それに満足されることなく、異文化間教育学に通底する独自の基盤を確定すべく尽力されました。私も、対象別の研究も共通基盤を捉えようとする研究も、両者を大切に、今それらがどこまで到達しているのかを確認し、社会に発表していく作業が必要なのではないかと考えております。今、「異文化」は異文化間教育学会の独占物ではなくなっており、研究はより裾野を広げて多様な学会で行われています。しかし、多様な「異文化」を対象に研究する研究者が集まり、その根底を探ろうとする協力とそのシナジーを生み出せる学会は異文化間教育学会を置いてありません。ここまでのこの二つのアプローチの到達点を確認し、次の発展を準備する活動ができればと考えております。

第二は、学会員の増加とこれまでの活動の点検により、財政基盤の安定化をはかる活動です。グローバル化が進む今日、本学会がますます重要な役割を担うことは明白です。それだけに、学会運営を合理化し、喫緊の課題により重点的にフォーカスしていく必要もあります。

非力な会長ですので、皆様からのご支援なくしてはとて叶いません。会員の皆様の積極的な参画を切にお願いする次第です。